
二十年 から

葉崎あすか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二十年 から

【Nコード】

N0033B

【作者名】

葉崎あすか

【あらすじ】

誘拐犯がでできます。幽霊もでできます。ドッペルゲンガーも……。

私は七海 京子。26歳。やっと、小学校教師という職業に慣れてきた頃。

私には、両親はいない。私が、小学校のときに強盗殺人事件にあつて、殺されてしまった。そのときは、私が学校に行っているときだった。

何も知らないまま帰ってきた私の目に飛び込んできたのは、家族の哀れな姿だった。

私のほかに、生き残った人がいた、それは、私のおばあちゃんだつた。旅行をしていたので、テレビで事件のことを知ったおばあちゃん、私も死んだと思つたらしくて、家に帰つたらしょうがないと、どっかに旅に出かけたらしい。

私が20歳になった頃、風の便りでおばあちゃんは、この時になつて初めて私が生きていることを知つて、慌てて帰つて来た。ごめんね、と謝りやがら。まあ、私が子供の頃から、ボケていたから、別に怒りはしなかった。

そして、現在。

私は、小学校教師として、祖母と一緒に暮らしている。

私は、今学校にいる、そして、ここは、学校の廊下。一人の女の子が泣いている。服装は、20年ぐらい前に流行つた服を着ている。私もずっと前にこんな服を着たような覚えがある…。

低学年ぐらいだろうか。こっちまで悲しくなる泣き声だ。

「どうしたの？」迷子だろうと思いつつも聞いてみる。

「分からない」女の子は答えた。

「それじゃ、何年生？」

「分からない」うーん、今は春だし、学年が変わつたりして分からなくなるの…かも…。

「名前は？」名前が分かれば、名簿を見れば何年生か分かる。はず。

「分からない」

うーん、困った。と、普通は思うはず。だけど、私はまったく違うことを思い出していた。

私と同じだ…。20年前の私と…。

20年前。

私は、6歳だった。この頃の私はかなり生意気だった。

暇になると、いつも同じことをやっていた。

迷子のふりをして、

大人を困らせていた。

何を聞かれても、

「分からない」と、答えて困る大人を見て、楽しんでいた。

その日も、そうだった…。

暇な私は、いつものように遊んでいた。

今日の遊び相手は、20歳ぐらいのやさしそうな男の人。

色々と質問されたあと、最後にこう聞かれた。

「それじゃあ、君は迷子になちゃたんだね」

「分から…？」分からない。と、いつもの様に答えようとした私の声が止まった。

何故なら、優しそだった目が、キュツと細くなったからだ。本能的に感じた。

この人は…不審者だ。

「それじゃあ、君のお母さんを探してあげよう」

断る暇は、なかった。

「だけどその前に、こうするよ。」

白いハンカチが口に押し当てられた。ほのかに甘い香りがする。

暗い。ここは…どこ？私は…京子…。

真っ暗だ。

どこかに閉じ込められているみたいだ。

「助けて〜」叫ぼうとした。無理だ。口にガムテープが貼れている。手にも、足にも。

暗い、狭い、苦しいの3拍子そろった最悪の所に私はいた。すると、何かが聞こえてきた。

「…ふざけるな！」さっきの人の声だ。誰とはなしているんだろう。私は、耳を澄ます。

「用意出来ないだと？100万だぞ！娘より100万のほうが大事か！…もういい、娘は、殺す。」…脅迫電話だ。私の家に。そして、うちの人は…。私を捨てたんだ。

…あれ？…涙が…。涙があふれて、とめどなく出てきた…。100万円のために、殺されるんだ…。

ビリッ、ビリッ、ビリッ、突然光が差し込んだ。目が眩む。どうやら、私は段ボール箱に閉じ込められていたみたいだ。

「聞いていたのか」

私の流れている涙を見て言う。

「かわいそうだな、100万のために殺されるんだぜ、死んだら親に祟ってやれ」

ハハハと笑ってから、急に真顔になった。そして、ポケットから、何かを取り出した。それは、理解しなくても、理解してしまう、金属の鈍い光沢の…ナイフ…だった。

ギリリ、光が反射して光った。

眩しい！思わず目を逸らした。そのすきに、ナイフが私の心臓に刺さった。私は…死んだ。

現在。

ワタシハ、コロサレタ…？

何故？それだったら、何故私は、ここにいるの？

……そっか、私が殺された世界から見ると、ここは、あの世だ…。

そして、私の前にいるこの子は、私だ。20年前の、自分。

多分、この子は私が忘れていた記憶を思い出させるために来たんだ。おばあちゃんが来たのは、死んだからだ。ごめんね、と私に謝ったのは、脅迫電話に出たのは、おばあちゃんで、電話の意味が、分かんなかったのだろう。だから、脅迫を断ったんだ。だから、私は、殺されたんだ。

でも、何で今頃この子は来たの？

……あ、今日は私の、命日だ。

本で読んだことがある。同じ世界に、同じ人物がいてはいけなないとそれに、二人がお互いに気付いたら、そのどちらかが、消えてしまふと。

それじゃ、私が消えますか、犯人を祟ってから、ね。

でも、どうやったら、祟れるの？

（後書き）

ホラーでした。一応は。

怖くはないかもしれませんが楽しんでいただけたら幸いです。

実はこの話に続きがあるのですが気に入らなかったなので短編と言う形を取らせていただきました。

ですが気が向いたら投稿するかもしれません。

そのときはどうぞ読んでやってください。

それではまた次の物語で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0033b/>

二十年 から

2010年12月13日18時17分発行